

# 表面的自己開示により推測されたパーソナリティ のフィードバックが対人感情に及ぼす効果

## The Effect of the Feedback about Personality Inferred from Superficial Self-disclosure on Interpersonal Feelings

内藤 哲雄  
Tetsuo Naito

われわれは、他者と相互交渉を行う際に、卒直に自分自身について話そうとすることがある。これが自己開示 (self - disclosure) とよばれるものであり、親密な人間関係を築いていくうえで重要な役割を果たすものである (Altman & Taylor, 1973)。自己開示は、それ自体が被開示者の感じる対人魅力に作用する要因であるが (中村, 1986)、同時に、その内容は対人認知の重要な手がかりとなる (安藤, 1986)。

しかしながら、相互交渉をもつ両者が、見知らぬ他人同志であるとか、親密でないときの開示内容は、服装の好みや趣味などの浅い領域に限定されるのが通例である (Chaikin & Derlega, 1974)。従って、パーソナリティなど開示者の深部に関心をもつ場合には、表面的な開示内容から推測しなければならないことになる。これらの深部の領域に関する推測内容は、被開示者の胸の内に秘められることもあるが、両者が親密化していく過程においてフィードバックされることが多い。

ところが、既述のように、フィードバックされる推測内容は、両者の親密度が低いときほど、より表面的な開示を手がかりとして決定されがちとなる。このため、開示者の自己像とフィードバックされた推測内容との間に、食い違いが生じやすい。このような事態では、Heider (1958) のバランス説や Newcomb (1968) の A - B - X モデルなどのいわゆる認知的一貫性 (cognitive consistency) の理論によれば、食い違いの大きい方が非好意的な対人感情を招来すると予測される。すなわち、開示者は、フィードバックされた推測内容が自身のイメージと食い違うほど、相手に対して否定的

な感情を向けることになると考えられるのである。

本研究の目的は、上述のような考察をもとに、面識のない相手に浅い領域の自己開示をし、これに基づいて推測されフィードバックされたパーソナリティの内容と自己像とが食い違うとき、どのような対人感情を抱くかを実験的に検討しようとするものである。

### 方 法

#### 被 験 者

女子短大生 173 名。このうち実験操作後の第 2 セッションに参加しなかった者および回答の一部に欠落のあった者の 24 名は、データ分析から除外された。

#### 実験材料

##### (1) 表面的自己開示のための単語リスト

大半が女子短大生に好まれやすいものからなる 57 個の単語が記載されており、これらのリストの中から好きな順に 5 位まで番号を記入させるようになっている (Fig. 1 参照)。

##### (2) 性格を自己評定させるための尺度

形容詞の対からなる 8 尺度で構成されており、被験者自身の性格について、それぞれ 6 段階で評定させるようになっている (Fig. 2 参照)。

##### (3) 推測された性格を評定するための尺度

被開示者により推定されたものとしてフィードバックされる性格評定の尺度は、上記(2)と同一であるが、上部の文章は、「別紙で好きな順にあげ

以下にあげられた単語のなかで、あなたの好きな順に5つあげて〔 〕の中に番号を記入して下さい。

そよ風〔 〕	新 緑〔 〕	クラシック〔 〕
猫〔 〕	海〔 〕	民 謡〔 〕
犬〔 〕	山〔 〕	歌 謡 曲〔 〕
野 球〔 〕	秋 祭〔 〕	ジャズ〔 〕
並木道〔3〕	七 夕〔 〕	日本髪〔 〕
温 泉〔 〕	ゆかた〔 〕	ヒョコ〔 〕
ツバメ〔 〕	へ ビ〔 〕	三味線〔 〕
ウサギ〔 〕	ライオン〔 〕	ギター〔 〕
ココロギ〔 〕	鷹〔 〕	マージャン〔 〕
柿〔 〕	ワ ニ〔 〕	ヨーロッパ〔 〕
カステラ〔 〕	白 夜〔 〕	アフリカ〔 〕
金 魚〔 〕	飛 行 機〔 〕	雪〔 〕
虹〔 〕	コーヒー〔 〕	ヨット〔 〕
オルゴール〔 〕	黄 昏〔2〕	緑 茶〔 〕
登 山〔 〕	星 空〔4〕	紅 茶〔 〕
ラグビー〔 〕	せせらぎ〔 〕	石 仏〔 〕
夢〔 〕	春〔 〕	読 書〔 〕
秋〔5〕	トランペット〔 〕	冬〔 〕
お花畑〔1〕	霧 雨〔 〕	夏〔 〕

Fig. 1 自己開示のための単語リストと被験者H.R.の回答

た5つの単語から、どのような性格の人か考えて、以下の尺度においてそれぞれ該当する箇所に○をつけて下さい」と変えられている。

あなたの性格について、以下の尺度においてそれぞれ該当する箇所に○をつけて下さい。

	非 常 に	か な り	や や	か な り	非 常 に
にぎやかな	-----○-----				しずかな
さびしい	-----○-----				じめじめした
あかるい	-----○-----				く ら い
積 極 的	-----○-----				消 極 的
社 交 的	-----○-----				非 社 交 的
は で な	-----○-----				じ み な
感 情 的 な	-----○-----				知 的 な
革 新 的 な	-----○-----				保 守 的 な

Fig.2 性格の自己評定尺度と被験者H.R.の回答

#### (4) 評価能力の判断ならびに好悪感情の測定のための尺度

評価能力の判断と好悪感情の測定のための尺度は、いずれも内藤（1984，1985）と同一のものである。

評価能力の判断は、被験者の性格を推定した人について、①判断が的確である、②理解力がすぐれている、③人を見る目がある、④偏見のない判断をしている、の4項目からなり、それぞれどの程度であるか、“全くそのとうり”から“全くちがう”までの7段階で回答させるようになっている。

他方の好悪感情の測定に関しては2尺度が用意され、被験者の性格を推定した人を、①好きになれるかどうかについて、“全く好きになれる”から“全く好きになれる”まで、また②共に仕事をしてみたいと思うかどうかについて、“全くしてみたい”から“全くしたくない”まで、いずれも7段階尺度となっている。

#### 手 続

実験は全て集団状態で実施された。第1セッションでは、まず被験者に、表面的自己開示のための単語リストの中から、好ましい順に第5位まで番号を記入させた。ついで被験者自身の性格について評定尺度の該当する位置に○印を記入させ、これらの用紙を回収した（Fig. 1、2 参照）。

つぎに実験者は、各被験者の性格評定結果をもとに、他者による性格推定としてフィードバックするための、にせの評定が記入された用紙を作成した。それらは、筆記用具や○印のつけ方が各被験者と異なるように配慮しながら、8尺度の全てについて反対の極方向に0（被験者の回答と全く同じ評定）、または1または3ポイント移行させる3種類のいずれかであった（Fig. 3 参照）。ずれの条件が0、1、3のいずれになるかはランダムに決定し、ほぼ被験者の3分の1ずつに分割した。

翌週に実施された第2セッションでは、上述のあらかじめ用意しておいたにせの他者による性格推定の評定結果を、「好ましい順に5位まであげられた単語リストをもとに、他大学の女子学生が性格を推定したもの」と教示して、各被験者に手渡

別紙で好きな順にあげた5つの単語から、どのような性格の人が考えて、以下の尺度においてそれぞれ該当する箇所に○をつけて下さい。



Fig.3 被験者H.R.の自己評定をもとに作成された他者による性格推定(1ポイント移行条件)

した。それとともに、被験者の性格を推定した他大学の学生について、評価能力と好悪感情の評定をさせ、用紙を回収した。

## 結 果

対人感情のカテゴリーとして、評価能力の判断と好悪感情の生起に関する2つの評定尺度が用意されていた。そこでまずこれらの尺度別の結果についてとりあげる。

### 評価能力の判断

評価能力の判断を測定するための項目は4つあり、いずれも7段階である。得点が高いほど能力ありと評定したことを表わすように、それぞれ0~6点があたえられた。合計得点の分布可能範囲は0~24点となり、中央値は12点である。

TABLE 1 評価能力の判断に関するM・SD

ずれの条件	0 (N=49)	1 (N=50)	3 (N=50)
評価能力	17.47	13.66	5.46
の判断	(3.35)	(3.84)	(5.04)

注 (1)数値大: 評価能力の判断良  
(2) ( ) 内の数値はSD

各条件ごとの合計得点の平均値は、TABLE 1に示されているように、ずれ1がもっとも中央値に近く、ずれ0ではやや評価能力あり、ずれ3では能力がかなり劣っていると判断したことがわかる。分散分析の結果、TABLE 2に示されているように、きわめて高いF値が得られ、0.5%をはるかに越える水準で有意差がみられた。さらに項目別に平均値を算出した結果もほぼ同様であり、分散分析では4項目の全てにおいて、0.5%をかなり越える差がみられた。

TABLE 2 評価能力の判断に関する分散分析表

変 動 因	平 方 和	自 由 度	平 均 平 方	F
ずれの条件	3738.29	2	1869.15	106.748***
個 体 差	2555.85	146	17.51	

\*\*\* P < .005

ついで、合計得点に基づき各条件群間の差をt検定で検討したところ、ずれ0と1で $t = 5.219$  ( $df = 97$ ,  $P < .001$ )、1と3で $t = 9.059$  ( $df = 98$ ,  $P < .001$ )、0と3で $t = 13.795$  ( $df = 97$ ,  $P < .001$ )となった。

上述の結果は、被開示者によるパーソナリティの推測内容が、開示者の自己評定と一致するときには評価能力がややあると判断し、ずれが大きくなると能力がかなり劣るとみなしたことを示すものである。換言するならば、被開示者による推定と開示者の自己評定が食い違うほど、被開示者の判断が不的確であり、理解力が劣り、人を見る目がなく、偏見のある判断をしたと感ずることがあきらかにされたといえよう。

### 好悪感情の生起

好悪感情の生起を測定するための項目は2つであり、いずれも7段階である。評価能力の場合と同様に、得点が高いほど肯定的であることを表わすように、それぞれの項目に0~6点があたえられた。合計得点の分布可能範囲は0~12点となり、中央値は6点となる。

各条件群の平均値は、TABLE 3にみられるように、評価能力と同じようにずれ1のときがも

TABLE 3 好悪感情の生起に関するM・SD

ずれの条件	0 (N=49)	1 (N=50)	3 (N=50)
好悪感情の生起	7.47 (2.22)	6.96 (2.10)	4.14 (2.69)

注 (1)数値大: 好感情  
(2) ( ) 内の数値はSD

っとも中央値に近く、ずれ0ではいくぶんかの好感情が、ずれ3ではやや悪感情が生起したことを示している。分散分析の結果は、TABLE 4 のようになった。先の評価能力ほどではないが高いF値となり、0.5%よりもかなり低い水準で差がみられた。さらに項目別に分析したところ、平均値と分散分析のいずれにおいても、合計得点と同様の傾向や有意差が確認された。

TABLE 4 好悪感情の生起に関する分散分析表

変 動 因	平方和	自由度	平均平方	F
ずれの条件	319.96	2	159.98	28.365***
個 体 差	824.15	146	5.64	

\*\*\* P < . 005

つぎに合計得点により各条件間の差をt検定で検討したところ、ずれ0と1で  $t = 1.163$  ( $df = 97$ ,  $P > . 10$ )、ずれ1と3で  $t = 5.785$  ( $df = 98$ ,  $P < . 001$ )、ずれ0と3で  $t = 6.643$  ( $df = 97$ ,  $P < . 001$ ) となった。

これらの結果は、被開示者によるパーソナリティ推定が自己イメージとかなりずれた場合のみ悪感情が生じ、好きになれないし、一緒に働きたくないと感じるようになることを示唆している。

以上のように、評価能力の判断と好悪感情の生起に関するいずれの分析結果も、表面的自己開示により被開示者がパーソナリティを推測しフィードバックするとき、開示者の自己認知と食い違うほど非好意的な対人感情を抱くようになることを

示すものである。しかしその傾向の強さは、対人感情の下位カテゴリーによって異なり、判断的確さや理解力、人を見る目があるかとか偏見のない判断をしているかの評価能力については、少しの食い違いによっても著しい反応を示す。これに対し、好き嫌いや共働についての感情は、かなりの違いがみられる場合にのみ生じることがあきらかにされた。

## 考 察

本研究の実験結果は、ほとんど面識のない相手からの表面的自己開示に対し、いきなりパーソナリティなどの深部に関する推測をフィードバックするのは得策でないことを示唆している。というのは、浅いわずかの開示情報から開示者の深部まで推測することは、きわめて困難であるからである。そして、開示者の自己像と食い違った推測をフィードバックし、それを開示者に意識化させるならば、非好意的な対人感情を招来することになるからである。

ところで、Altman と Taylor は、社会的浸透 (social penetration) 理論を提唱し、自己開示の深さは領域面の拡がりに対応しており、親密化の進展につれ開示が「くさび」のように打ち込まれ、両方の次元が少しずつ拡大・深化していくことを主張している (Fig. 4参照)。また、相手からの自己開示に対しては好感情が生じるだけでなく、被開示者も同様の自己開示を返そうとする返報性 (reciprocity) の存在することが知られている

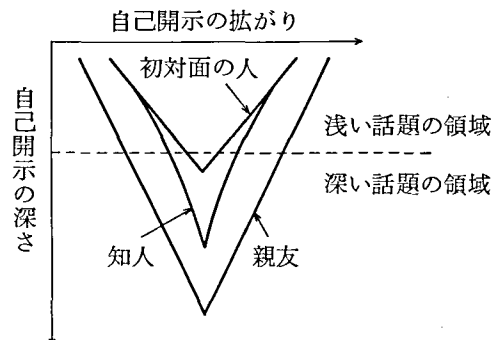


Fig.4 社会的浸透過程における自己開示の深さと拡がり (Altman & Taylor, 1973)

(Jourard, 1959)。そして、浅い自己開示に深い自己開示で応じたり、深い自己開示に対し浅い自己開示を返すことは、この返報性の規範に従わないものとみなされ、相手に悪感情を生じさせる。ただし返報者は、心ずしも同じ深さで開示する必要はなく、深い自己開示に対しても積極的な関心や同情を返すならば、規範を逸脱したことにはならず、かえって高い評価を受けることになる(Berg & Archer, 1980)。

そこで、ほとんど面識のない相手との親密化を望む被開示者のとるべき方略としては、表面的自己開示に対し関心を示したり表面的自己開示を返すことで、開示者の開示領域を次第に拡大させ、くさびを打つように少しずつ深い開示へ進展させることであろう。こうして得られたより多くの情報をもとに、開示者の深部を総合的に判断してからフィードバックするのが効果的であるといえよう。

ところで、上述の知見は社会心理学的な観点によるものであるが、臨床心理学における治療技法との類似点も窺える。例えば、カウンセリングでの受容、繰り返し、明確化、支持のリレーション(国分, 1979)は、まさに表面的自己開示から深い自己開示に進ませ、さらにこれまで本人には気付かれなかった自己についての洞察にまで至らせる技法にはかならないといえよう。また、被開示者側からの自己開示が治療的人間関係を深め、開示者の自己洞察を援助するために適用できることが知られている(Weiner, 1978)。これらの技法はいずれも、開示者自身の自己像を変容させる操作を含むとはいえ、相手の自己開示の内容からパーソナリティなどの深部について推測し、フィードバックしていく過程にかかわるものである。そして本研究から得られた知見によれば、カウンセリングなどの心理療法においても、フィードバックされる推測内容がクライアント(患者)の自己認知と食い違うほど、非好意的な対人感情が生じると考えられる。さらに対人感情の下位カテゴリー別にみると、悪感情を生起させる傾向よりも、評価能力(専門能力)が劣っていると判断される傾向の方が強いことが予測される。このため臨床場面においても、自己開示の領域を拡大させながら深化させ、より多くの情報収集をして深部の評

価・診断をし、フィードバックしていくのが効果的であると考えられる。

以上のように、表面的自己開示によりパーソナリティなどの深部を推測しフィードバックするとき、開示者の自己像との食い違いがどのような対人感情を生じるかという本研究のテーマは、社会心理学の知見にとどまらず、臨床心理学における治療技法の実験的検討やそれらへの応用という点からも意義を認めることができよう。

## 引用文献

Altman, I, & Taylor, D.A. 1973 *Social penetration: The development of interpersonal relationships*. Holt, Rinehart, and Winston.

安藤清志 1986 自己開示 対人行動学会編  
対人行動の心理学 誠信書房, 240 - 246.

Berg, J. H. & Archer, R. L. 1980 Disclosure and concern: A second look at liking for the norm breaker. *Journal of Personality*, 48, 245 - 257.

Chaikin, A.L. & Derlega, V.J. 1974 Variables affecting the appropriateness of self-disclosure. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 588-593.

Heider, F. 1958 *The psychology of interpersonal relations*, John Wiley & Sons.

Jourard, S. M. 1959 Self-disclosure and other cathexis. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 59, 428-431.

国分康孝 1979 カウンセリングの技法 誠信書房

内藤哲雄 1984 因果の自己帰属, 他者からの帰属と対人感情 社会心理学評論, 第3号, 64-71.

内藤哲雄 1985 学業成績に対する認知者間の因果

帰属の差異が対人感情におよぼす効果 長野大学紀  
要, 第7 巻第2 号, 71-75.

中村雅彦 1986 自己開示 対人行動学研究会編  
対人行動の心理学 誠信書房, 141-142,

Newcomb, T.M. 1968 Interpersonal balance.  
In R.P. Abelson, E.Aronson, W.J.McGuire,  
T.M. Newcomb, M. J. Rosenberg & P.H.

Tannenbaum. (Eds.) *Theories of cognitive  
consistency: A sourcebook.* Rand McNally,  
28-51.

Weiner, M.F. 1978 *Therapist disclosure:  
The use of self in psychotherapy.* Butterworth.  
(佐治守夫監訳 飯島喜一郎訳. 1983 人間としての  
心理治療者 有斐閣)